

おにぎりアクション

論説



題 宇山村 彩華
(大野市)
カット・神内 八重

おにぎりの写真を投稿する。途上国の子どもたちに給食が届けられるプロジェクト「おにぎりアクション」に、福井県とあわら市が自治体パートナーとなって5年。SDGs（持続可能な開発目標）達成を目指す社会の潮流もあり、活動の輪は徐々に広がりをを見せている。

このプロジェクトはあわら市出身の大宮十絵さんが提唱。NPO法人テーブル・フォー・ツー（東京）が2015年から展開してい

る。法人のサイトやSNS（会員制交流サイト）に、おにぎりにまつわる写真を投稿すると、1枚につき給食5食分（100円）が協賛企業・団体から寄付され、アフリカやアジアの子

どもたちに給食が届く仕組みだ。参加者は無料で投稿できるため「楽しく社会貢献ができる」と注目を浴びている。

本年度のプロジェクトは、10月5日から1カ月間に、世界35カ国から約27万

4000枚の写真が投稿された。これは約140万食分に相当し、昨年と比べ1.5倍以上の実績だ。日本から世界を愛する取り組みとして拡大しつつある。

背景にはSDGs達成に向けた社会全体の機運の高まりがある。NPO法人は食店の協力を得てオリジナルの「あわらむすび」を提供した。「今年は昨年を200枚近へ上回る約900枚の市民からの投稿があり、徐々に増えている」と手応えを感じている。

新しいのが福井県とあわら市である。市は「あわらむすび」と銘打ち、市の魅力発信や郷土愛、コメの消費拡大を目指し17年、活動に名乗りを上げた。

市は子ども園や各小中学校に呼び掛けて写真を撮ってもらう一方、市内11の飲

食店の協力を得てオリジナルの「あわらむすび」を提供した。「今年は昨年を200枚近へ上回る約900枚の市民からの投稿があり、徐々に増えている」と手応えを感じている。

新しいのが福井県とあわら市である。市は「あわらむすび」と銘打ち、市の魅力発信や郷土愛、コメの消費拡大を目指し17年、活動に名乗りを上げた。

食育、米食とつながり進化へ

社会的な連携が高まる中、意識のある取り組みである。このプロジェクトは貧困をなくそうという目的だけではなく、食生活の改善や地産地消、健康寿命の推進にも通じるのではないだろうか。

福井市出身の医師、石塚左文が提唱して広まったのが「食育」。プロジェクトを全国の学校に広め、食育、米食とつながれば、もっと多角的に関心が広がるのかもしれない。途上国の子どもたちへの支援という視点からはもちろん、SDGs達成への貢献、食育の考え方がさらに多くの人に根付いていくってほしい。